

さざなみ

国語教室

さざなみ国語教室
 第495号 2023年6月25日
 発行者代表 吉永幸司
 連絡先 大津市柳川2-11-5
 TEL 077-522-1008
 発行所 滋賀児童文化協会
 NPO 現代の教育問題研究所

子どもが輝く学校であるか

西田 淳

様々な研究会で「個別最適な学び」という言葉を聞くようになった。「学習の個性化を図ること」が求められるが、相変わらず教師は自分の計画通りに綺麗に進む授業を目指してはいないだろうか。「指導の目標ははっきりしている。計画はきちりと立てられている。どんな手順で、どこへ到達させるのかも検討がつけられている。それでいいではないか。立派な授業ではないか、と言いたいのだが。しかし、子どもはそれで生かされることになるのだろうか。一見、形式は整い、すきまのない授業というものは、意外に子どもを束縛して、型はまりの、息苦しい授業となる。まず、子どもは教師の一方的な計画によって動かされるのだから受身の立場になる。」

本校の訓導、今井鑑三の言葉だ。

「教えて分からせよう」という教師の強い思いが、教師の願いと裏腹に子どもたちが個々に持っている輝きを奪い、受身の子どもを育ててはいないか。いったい、私たちはどのような子どもを育てようとしているのか。

数日間、担任の代わりに学習に関わった5年生の教室での話。

その教室には、一人の気になる女児の姿があった。どこことなく目の輝きがないような子だった。学習に意欲的に取り組んでいる様子もない。当然、心配だった。

参観日の学習も私が行うことになり、「明日の学習参観では、自分の好きなものや、好きなこと、みんなに話したいことを発表しましょう」と提案した。すると、「やりたいです」と手を挙げた多くの児童の中に、その女児もいた。こ

れには驚いたが、嬉しくもあった。彼女は前を向いていたのだ。学習参観の当日、一番にその女児が発表した。自分の推しているアニメの話だ。いつもの彼女の様子からは信じられないほど、生き生きとした表情と声でみんなにその作品の良さを伝えていた。

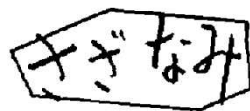
「みなさん、登録お願いします」彼女の目は輝いていた。私は大丈夫だと安心した。

「アニメの話なんて」と思うかもしれないが、私はこれでいいのだと思う。学校の学習時間に、自分が輝けて、教師や仲間がそれを温かく受け止めてくれる場があれば、子どもたちにとって学校は楽しいところになり、学習の意欲も高まる。本校で、そんな子どもたちの姿にたくさん出会ってきた。

これから時間をかけて自分を伸ばしていけばよい。人が成長するには時間がかかるものだ。教師はそれを温かく見守り、認め、支える。そうやって子どもは個性的に伸びていくのだ。ところが現実には、教師はすぐに身につく力ばかりに目を向け、どのように教えるかととられ、目に見える結果のみでその子を評価してはいないか。

我々教師の「教えよう」「分からせよう」は本当に子どもを伸ばしているのだろうか。個々の子どもたちの何を伸ばし、何に繋がっているのか。学校は、一人ひとりの子どもが輝ける場所でありたい。

(奈良女子大学附属小学校 主幹 教諭)



▼小学校456年を対象に「学びの基礎チャレンジテスト」を滋賀県が行っている。「書くこと」の内容で滋賀県平均を大幅に上回った小学校の研究紀要を拝見した。その学校は高

島市立安曇小学校。研究テーマとして「読み解く力」の授業づくりを掲げている。研究主題設定の理由は「主体的に自分の言葉で書いて表現できる子どもの育成を目指して研究に取り組む」とあり明快▼研究内容・方法も明快で、①教材研究の流れ②授業の課題を明らかにする③効果的な振り返り④見上げてみる。注目したのは「授業づくりシート」が「終末から授業をデザインしていること。具体的には、ステップ1では「まとめ」と「めあて」を設定すること。ステップ2では学習活動を「終末・導入・展開(展開・導入)」の順で考えていること。授業の捉え方が結果からの発想である▼具体的な終末段階の「ふりかえり」では次の4つのポイントを示している。「理解(わかった)活用(できた)納得(なるほど)追及(しりたい)」と明確である。さらにパワーアップタイム(毎水曜日15分)では、正しく・丁寧・美しくを目標にして視写活動の継続がある▼次の段階では研究成果を他の教科や教育活動全般において活用したいと、勢いがある結びの言葉でまとめている。(吉永幸司)

課題解決につなげる問い作り

高木 富也

昨年度に引き続き三年生担任となった。昨年と同じ教材、しかしながら目の前の児童は異なり、同じ授業展開とはいかない。「授業は生き物」という面白みを再認識した一学期前半である。

昨年度から、問い作りの実践を行っている。児童主体の授業になる問い作りに魅力を感じる一方で、設定した問いが本当に単元のゴールに繋がっているのだろうか?という疑問も残っていた。そこで今年度は、「ゴールに繋がる問い作り」をより意識して実践を行うことにした。

文学「すいせんのラッパ」では、「様子を思い浮かべて音読する」ことを単元のゴールとし、言語活動として学習参観での音読発表会を設定した。初発の感想を交流し、「なんで?どうして?」をたくさん考えるよう指導し、自分の問い↓班の問い↓三年月組の問いと、三段階で問いを設定した。自分の問い・班の問いは、学習の中で自分なりに解決していき、三年月組の問いは、全員で納得するように話し合いながら解決するというねらいである。音読発表会へと繋げることを意識しながら問いを吟味していった結果、「①なんですいせんのラッパの音がちがうの? (音読の工夫)」「②なんでかえるの様子がちがうの? (必然性)」

「ありは、なんのためにいるの? (設定)」という問いを立てることができた。授業の導入で学習計画表や学級の問いを確認し、人物の様子や言動から感じる性格などを想像させ、授業のまとめで再度学級の問いを確認する。「今日は問いを解決できたかな?」「まだ納得できないな。」「かえるの様子はおかしくてきたぞ。」などと、学びが連続していく様子が見られた。また、三つの問いが独立しているのではなく、それぞれ関係性があることにも児童は気づいていた。「かえるの様子が違うから、ラッパの音が違うんだ!」「ありがいるから、かえるの様子がもつとわかって、お話が盛り上がるんだ!」などの発言があり、それぞれの問いがつながり、解決していくことが、音読発表会への工夫とモチベーションに繋がったと考察する。形式として問いを立てて終わり、ではなく、常に設定した問いに返していき、どう活かしていくかが重要だと学んだ。

今回の実践を通して、教材と単元のゴール(言語活動)を意欲的に繋ぐのが「問い」であると感じられた。問いを自分たちで立て、学びを自分事とすることで、主体的に学んでいく姿が見られた。今後も課題解決へと効果的に繋がる問いを児童と立てていきたい。

(東近江市立能登川南小学校)

心の動きを書き表そう

谷口 映介

作文を書く時間は、子ども達にとってあまり好きではない時間になりがちである。多くは、「書きたくない(意欲面)」「書くことがない(生活の中で題材を見つけない(技能習得面))」に起因するよう思われる。ただ、元来子ども達は書くこと自体は嫌いではない。コツさえつかめれば進んで書くことも多いのである。今回は、音楽会をテーマに、書くポイントを絞って書くことに挑戦した。

一、場面を切り取って書く。日記風に書くと、多くは、「今年生会の発表でした。始めは、一年生の発表でした。...」と事実の羅列になる。そうならないために、四年生の発表に絞って、「心の動き」や「周りの様子」を入れて書くことを持たかけた。行事作文を子ども達は嫌がるが多いため、目的が分からず、書かされていくという意識になるからである。今回は、技能面を高めることが目的であることを子ども達に意識させた。「書くコツ」を使って、物語の作家になってみよう!

二、「書くコツ」
今回「コツ」として提示したのは、次の三つである。

- ①書き出しを会話文(「」)から始める。
- ②友達・観客など、周りの様子(自分の目で見えたこと)を入れる。

③自分の心の動きを入れる。

①では、例を示した。例えば、「次は、四年生の発表です。」という案内が体育館にひびきました。という一文である。子ども達は次の様に書いた。

○Y先生の手がゆっくりと上がりました。発表が始まると、始めはみんなしょうじていた気持ちが一気に消え、なんだかうきうきしてきました。

○それを聞いたしゅん間、頭の中が一瞬真っ白になりました。

②では、自分の目の前で起きていることを事実として伝えることを大切にしました。

○合唱が始まるとすぐに、みんな真ん中になりました。みんなの口が大きく開いて、すごく大きな声で歌っていて「すい」と思いました。他の人もじっと指揮を見つめていたので、ぼくもがんばって負けないように見ていました。

○どんどん声も大きくなり、会場は、時間がたつごとに、とってもいい空気になっていきました。

③では、例えば、緊張した安心したまでの心の動きを詳しく書くことと呼びかけた。全員が四百字近く書き、「最初は、書けないと思ったけれど、書いたら案外簡単やった。」という声が多く聞かれた。

(竜王町立竜王小学校)

子どもたちの関心事
弓削 裕之

6月の6年生。運動会を控え、初めての組体の練習も大詰めという時期。自習時間を活用し、「探究学習シート」に取り組んだ。事前に「インターネットを使い、各教科の学習に関すること、または、学校生活に関することについて調べ」とだけ示した。

シートには、「①テーマ ②メモ ③振り返り」の欄を設けた。祇園祭、雨の強さ、南海トラフ、算数オリンピック、行動心理学：テーマは多岐に渡り、提出されたシートからは子どもたちの「今の」関心事が見えてきた。一部抜粋して紹介する。

Aさんのシート

【テーマ】国語力を伸ばす方法
【メモ】国語力を伸ばすと…レポート執筆や面接の場で活躍、人間関係にポジティブに作用する、正しく理解することができる。
国語力を伸ばす方法：読書（語彙が大幅に増える）、会話（他者の気持ちを感じ取れるようになる）、漢字練習、音読（記憶力を鍛える）

【振り返り】

もう6年生なので、テストや勉強に関わることを調べました。国語では、読書はそんなにやっていたなかったから毎日30分読もうかな、と思いました。音読も毎日1回やろうと思いました。

メモには、(Oがついているのは私がなりたいたいことです)と書かれ、「人間関係」の項目にOがしてあった。いつも穏やかなAさんは、誰とでも分け隔てなく接することができる。きっと人一倍相手を気遣って友だちと関わっているのだろう。

Bさんのシート

【テーマ】黒板を上手に書くコツ
【メモ】チョークは鉛筆持ちはせず、指先でしっかりつまむ。手首から肘を固定し、黒板と腕の間に空間を作る。目線を字の位置に合わせる。

【振り返り】

算数の時間によく黒板を書くので、私は特に黒板と腕の間に空間を作るということに気をつけて、丁寧に書くように思いました。

先日、児童会委員長に選ばれたBさん。これからたくさん、みんなの意見を黒板にまとめることになる。探求したことを活かして活躍してほしい。

学級会でよく発言するCさんは、「クラスの雰囲気をよくする方法」について調べていた。メモには、「教師が一番拍手する」と書かれ、色線が引かれていた。教師も探求することをやめてはいけない。4月に比べ少し猫背になっていた背筋が、ピンと伸びた瞬間だった。

(京都女子大学附属小学校)

「知らずに見れば」
少徳 信

学級で、「アップとルーズで伝える」の学習に取り組んだ。その中で、子どもたち自らが学びを得たと感じたであろう場面が見られたので、紹介したい。

「アップとルーズで伝える」に入る前の「思いやりのデザイン」では、双括型で書かれていること、中の事例が対比されていることについて学習した。双括型について考える場面では、「大切ですよ」「つまり」、「思いやりのデザイン」という題名と同じ言葉が出てくる箇所などに注目することで、「思いやりのデザイン」にはおわりだけでなくはじめにも主張が出てくることに気づいた。さらに、中の事例をベン図を用いて対比すること、二つの事例の良い面・いまいちな面を視覚的に捉えることができた。

それをふまえて「アップとルーズで伝える」では、筆者の主張と事例との関係を図で表し、誰が見ても内容が一目で分かるシートをつくることを目標に設定した。子どもたちからの申し出もあり、教師からの誘導や説明は一切なしで、子どもたちだけでシート作りを取り組むこととなった。その中で、とある男の子が、「先生、俺、分かってきたわ」と言いに来てく

れた。詳しく聞くと、今までは説明文を頭から読んでいて、読み終わる頃にはちんぷんかんぷんで結局何がどうなったかが分からなかったが、今回は後ろから読んでみたところ、「よくすることが大切ですよ。」の部分を見つけた。同じことがないかと思っははじめの方を探すと、はじめにも同じ書き方をしているところが見つかり、これが主張だ！とピンときたとのこと。その子は何重にもその部分に線を引き、何度も読み返していた。授業後、「よく頑張って読んでたやん」と声をかけると、「双括型 分かった。めっちゃ満足」と輝くような笑顔で返してくれた。

この男の子は、決して文章を読む力がなかったのではない。ただ、読むときに必要な視点を意識できていなかっただけである。もしこの男の子が双括型を知らずに文章を読み飛ばしてしまっていたとしても、双括型という言葉とその意味を知っていたからこそ、自分の力で気づくことができたのだと思う。

今回に限らず、新たな知識を身につけたとき、一つ新たな世界が開けるように感じることもある。子どもたちの世界を広げることには貢献するためにも、常に自分自身が学び続ける人間でありたいと思

(彦根市立高宮小学校)

「考えることを楽しむ
児童」を目指して
蜂屋 正雄

本校では、題のような子ども像を目指して、算数科、理科を窓口に取り組み、今年度は国語科での二年度である。国語科で研究を始めた当初は「国語科の教材研究の仕方から研修し、学んでいきたい。」という若手教師の要請にも応える形で校内研究を進めてきた。

当初の三力年計画では
① テキストを自分で読み、自分の考えを持ち書く力
② 自分の考えを交流することによって、考えを広げたり深めたりできる力
③ 自分の考えが交流することによって、どう変わっていったのかを振り返る力を一年ずつ研究していこうとした。

一年目の昨年はテキストに線を引いたり、書き抜いたりするスキルを身につけることを中心に研究を進めることで、テキストを元自分の考えをもつ力をつけようと取り組んだ。児童は、テキストに線を引き、その理由を書く習慣の経験を積むという研究を進めていた。

成果として、文学的文章、特に、読書教材を元に、大切なところに線を引くスキルが身についた。また、ゴールイメージを共有しながら、線を引いた理由を交流する中

で、自分の考えと友だちの考えを比べる学習ができた。
加えて、線を引いたり、カードに書き抜いたり、全文掲示にシールを貼ったり、マトリックス表を見たりと、二年目に取り組もうと考えていた交流の実際はまだ、研究を進めることもできた。
教師も国語科の教材研究のいくつかの方法や、考えを交流させる学習展開を経験することができた。

一年目にして、大雑把ではあるが、三力年計画の大枠を経験することができた。

しかし一方で、読書教材を中心にすえ、「面白いところ」を交流してきたが、交流の結果はあまり収斂せず、発散したままで終わることが多かった。低学年の「おかゆのおなべ」とその後のいろいろなお話の紹介は、児童それぞれがどこを面白いとしても良いが、「お手紙」「三年とうげ」「初雪のふる日」「カレライス」において、面白いところはどこでもいいというわけにはいかない。その教材でしか考えられない表現や事柄に気づかせ、交流し、その成果をノートに書き残すことにも注力すべきだったのでは、という課題が出てきた。

そこで今年度は、
①教材文でつける力を明確に教師間で共有し、教材研究をすることで、交流の結果を収束させたり、分類させたりできるように教材と板書の研究をしたい。

②交流を子どもたちにとって必然性や目的のあるものにして授業展開を研究したい。
③児童の意見そのものを第二のテキストと捉えて、友だちの意見と自分の意見が地続きになる交流スキルの研究をしたい。

また、昨年度に引き続き、指導計画を立てる際には低位の子を中心に据える。
○教材文でつきたい資質能力を明確に示し、年間計画の中で位置づける。
○B評価を共有し、C評価の児童への手立てをもつ
○困っている子の問題意識を中心に授業が展開する
という、三つの視点は持っていきたい。基本の流れとしては、児童の疑問から課題を見つけ、みんなで解決方法を考えながら授業を展開していくイメージである。そこで、校内研究の副題を「児童の考え、感想、疑問で組み立てる国語科の授業と交流のつなげ方・構造的な板書の研究」とした。音読をした際に「漢字が読めない」「ことばの意味が分からない」といった基本的なことから、教材文の核心に迫る問題まで、全ての学習過程を児童の「知りたい」「聞いてみたい」「考えてみたい」で構成することで、児童に交流の価値と交流で得られた考えの良さに気づけるような国語科の授業を目指したい。

(野洲市立北野小学校)

編集後記

▼5月例会の提案は少徳(四九四回)

信さん(彦根市立高宮小学校)の研究教材「ひとつ花」(4年東書)▼教材研究と学習活動について提案をもとに研究を深めた。少徳さんの過程が分かる「読み取りメモ」をもとに単元の指導構想が示された。そのメモの一例は次の通りである。冒頭の「これが、ゆみ子のはつきり覚えた最初の言葉でした。」「の部分では、「倒置・何を・なぜ」の部分が、「どう書き込みが手」に提案」と考える視点を示した。メモに沿ってあげた。これは書き込みの一例であるが、教室の子供を思い浮かべながらの教材研究であった▼▼研究協議においては、学習活動に視点を定め、研究同様に考えを披露したり①場面ごとと比べて②具体的な授業の持ち方と深め方④具体的な授業の知恵等であつた。特に、実際のノートをもとに指導の方法を交流し共有した。場面で「ええ、もう食べちゃったんですけど」とゆみをあやすはお母さんごとを話題に、家庭で「あなたのお母さんに聞く」というインタビューの形式で提案された▼▼研究会のプログラム後半のミニ提案では、学校の研究紀要(海東さん)に学級通信(好光さん、北島さん)に学び合いました。また、機関紙「さざなみ国語教室」(494号)の記事から研修を行いました。玉稿をいただきました。深謝。(吉永幸司)